# 第２６４回　２月　国語を語る会

―はじめに―

【小川Ｔ】

今日は、倉敷国語の会の逸見先生にご発表をお願いした。県国の主題の元でがんばってくださっている。そういった実践を通した岡山と倉敷とのつながりを大切にしていきたい。

「友だち幻想」という新書がある。今だに本屋さんでうず高く積まれている。いじめというのを友達はなかよくにしないといけないでしょ、という指導の仕方の問題点について言及している本である。なかよしが大事だよ、ということではなく、あなたがしていることはルール違反ですよ、ということを指導するという発想をこの人はしている。これまでの教育現場にある発想とは違う視点で話をしている。いじめの指導の仕方が変わってくるのではないかと思う。大学の講義でそういう担当になっている。読まれたら価値観が随分変わると思う。友達１００人できるかは花丸か？そういう発想は〇か？自分が一年生の担任の時に、友達が全くできない子がいた。集団に入れない、できない子はいる。みんなが集団に入るという発想は子供にとってしんどい。高学年になったら、友達１００人の発想だと苦しい。絶対あいつの顔を見るのはいやだ、という子もいる。それを否定してはいけない。けれど、朝のあいさつはきちんとして、あとは関わらないというスタンスも必要。そうして子供は育っていく、ということを学校の先生は知っておかなければならない。

卒業論文をみているのだが、阿部先生の「構造読み・形象読み・吟味読み」の理論を取り上げ、構造読みを一次でされていることの意味を話した。そうすると学生の関心は変わってくる。吟味読みを卒論で取り組もうとしてくる。吟味読みは三次。それは国語しかできない授業なので、そこを大切にしたいと言っていた。なるほどなと思った。田近先生はそれを再読としておいていた。二次から三次の間に、何でそんな風に読めたのかという再読を行うことで、作品の表現や仕掛けを対象化してきちんと評価していく学習が始まってくる。もう一度読み直すことで、表現の仕掛け、すばらしさを考えていけるようになる。一次、二次と三次の入り方は、これから研究していく価値があると思う。

―逸見Ｔの実践発表―

〇質疑応答

【森下Ｔ】

二次から三次へのつながりの話題とその時間の振り返りの大切さを自分は考えている。自覚とは、その一時間を振り返って、どんな読みをしたのか考えていくことだと思う。一人一人の子供がその時間でどんな読み方を獲得できたのかということを大切にしている。一年生でも一年生なりに授業を重ねる毎にできてくるようになるなと思った。「あめ玉」の実践内容をお聞きしていて、「異質な考えとの出会い」と言われていたが、どのように論理的思考を働かせたから、読めたと子供が認識していたのか、どんな友達の読みに触れたから深まったと振り返られたのか、ということを具体例で教えていただきたいなと思った。全体の共有の部分がみんなの財産にもなってくると思う。

【逸見Ｔ】

「お母さんが困っていたから」と言っていた子は「ところが」の逆接に着目していた。お母さんはあめ

玉は二つあると思っていた。けれど、なかった。子供は逆接の言葉と予想外のことを関係付けることで、さむらいがお母さんのためにあめ玉を二つに切ったということを考えていた。子供がだだをこねていた、ということを思っていた子供達は、その考えから、新たに逆接と予想外の表現の良さに気付くことができた。それを「大造じいさんとガン」でもつなげることができたと思う。

【鳥越Ｔ】
　二つ教えていただきたい。一つ目は、主体的と中心人物の変容とのつながりをどう考えているか。二つ目は、読み方をどのように捉えているか。「大造じいさんとガン」なら、どのような読み方が子供達の力になったのか教えていただきたい。

【逸見Ｔ】
　一つ目のご質問について。子供達が自分から読みを進めていくことを考えた時、上位の子ならいいけれど、何を読めばいいのかわからない子もいる。その子にどうしたらいいのか示す柱として、「なぜ変わったのか」と言うことがわかりやすいと思った。物語を読む意識が高まると思った。自由に感想を書きましょう、では、高学年において断片的にしか登場人物の心情を捉えられない子がいたので、このように取り組んだ。
　二つ目について。中心人物の変容が柱になっていて、その構造を捉えていくことが方略としてあるのではないかと考えている。それが下の段階にある。見方・考え方って何というのが指導者側にあるので、まだ子供達に読解方略が十分に指導できていないところが課題だと感じている。ただ、変容を出来事とつなげて捉えていく力は絶対につけさせたい力だと思っている。まだ検討の段階ではある。

【小野Ｔ】
　教師サイドの課題として示してくださった、一貫性のある指導、活用する授業について。一貫性のある指導の方向性が、変容と捉えるものなのか、読み方を捉えるものなのか教えていただきたい。そして、子供が何を活用したのかということを教えていただきたい。おもしろかったのは、予想外の感想を大切にしていること。一次でそこも大切にしているのではないかなぁと思っているので、そこも紹介していただければ。

【逸見Ｔ】
　物語の細部に子供が十分に捉え切れていないことをどうすればいいのか、ということがスタートだった。わかりきっている子に対して何のアプローチをするか、全文を掲示して位置付けたりしていたが、その細部と全体とのつながりが弱かった。それは自分の授業のせいだと思っていた。中心人物の変容という型があると、構造のまとまりが見えてくると思った。全体を見通して文や言葉に迫りやすくなったかなと思った。全員の土台を引き上げたい、という見通しをもって取り組んだ。それについては成果があったかなと感じている。自分の中では、まだ見方・読み方が捉え切れていない。授業の終末をどうすればいいのかが、まだ迷いがある。物語の細部や文に立ち止まる二次があるから、三次で子供の考え方が変わってくるということは感じているが、まだ上手く整理ができていない。

【鳥越Ｔ】
　構造という言葉の捉えが二つあると思う。「出来事のこと」なのか、「イメージのこと」なのか。出来事の構造で変化を中心として物語を捉えていこうという考えなのか。

【逸見Ｔ】
　そういうことだと思う。

【北野Ｔ】
　イメージの構造とは？

【鳥越Ｔ】
　西郷先生の形象理論のこと。言語から受けるイメージがどうつながって、どう膨らんでいくかということ。子供達はイメージをもつことが重要だと私は思っている。中心人物を捉えるのは重要なこと。どの教材でも通用することだと思う。だけど、それだけじゃないだろうと思う。どの教材で何を教えるのかは教師がきちんと意識しておかないといけないと思う。

【逸見Ｔ】
　イメージだけだと、自分が授業をしていて全然整理できなかった。それを「大造じいさんとガン」の二次で出来事を捉えることで行動描写を捉え、そこに付加することで、読み手として語り合わせようとした。変化・変容を捉えるだけでは足りないことも、そうだと感じている。

【小野Ｔ】
　二人のお話のつながりがわかりにくいかなと思った。鳥越Ｔのイメージの構造とは、読者が想像するので読み手の頭の中でのこと。今回の実践では、作品のこと、書き手の頭をなぞること、という違いがあるのかなと思った。

【鳥越Ｔ】
　出来事でも、「クライマックスはどこ」などの発問も、読者が中心だと思う。それを中心に考えていけたらという案だと捉えていただけたらと思う。

【赤木Ｔ】
　文学を読むことのおもしろさは、自分の感想がもてることと、友達と共有することだと思う。その一次初発の部分で、中心人物の変容という規制をかけることで散らばらないようにしていると感じた。教室として、中核として読んでいこうとすることを言い合えて認め合える場となることが大切。始めから大きな枠を決めて捉えていくことはどうなのかなということを鳥越Ｔは言われているのかなと思った。それぞれの子のこだわりも大切にしていきながら、みんなで読みを追求していけたらといいのではないか。那須先生を囲んで筑波の先生が対談をしている本がある。一つの単元を勉強してたら、いろんな読解方略がある。それを系統付けてつないでいくのが先生の役目。だけど、国語の世界ではあまり大切にしてこなかっ

たことだと思う、という内容があった。単元の大事なものとして、登場人物の変化・変容は大切だけど、頭からというのが気になった。

【逸見Ｔ】
　自分の中での課題の中心だと思っていたこと。中心人物の変容を指導したいというより、物語に入っていく突破口にしていくためのものが、変化・変容だった。その先にあることにも進んでいかないといけない。バランスをとることが大切だと思う。

【田岡Ｔ】
　逸見Ｔの言われていることはよくわかる。子供達が読む時に捉えて欲しいポイントとして、中心人物の変化・変容があるのだと思った。そのきっかけを最初に子供が語る時は、とても簡単なことだと思う。それを詳しく語っていくのが二次だと思う。ただ第三次で子供主体で進められていたら、なお良かったのではないかと思った。

【磯野Ｔ】
　子供達が「変化したきっかけ」という枠組みをもって読むことは大切なのだろうなと思った。教科書を見ていると、登場人物が変化して、きっかけがあってという作品が多い。だからそういう読み方がすんなりと入ってくるのだろうなと思った。物語でいつも登場人物が変化しているのかなと感じることもある。教科書では、そういった作品はあまりないなと思う。

【河上Ｔ】
　５年生になって、細部しか着目できない子を自分は育てていたなと思っていた。細部にだけ囚われない初発の感想の書き方ってあるのかなと思ったので、教えていただきたい。

【逸見Ｔ】
　物語をどれほど捉えて感想をもてているのかという思いもあって、初発の感想を見ている。関係性が見えてないから、二次でどのように読んでいこうかなと考えて授業をしている。一人一人が自由な感想を言う時に、自分がしているのは、感想を言い合うだけに終わらせないようにすること。どうやったら絡むのかということ。最低限立ち止まって欲しいということでこの実践をした。

【森下Ｔ】
一次と三次では子供がもつ感想は違ってくると思う。何に着目できたのかということの振り返りがあったら良くなるのではないか。

【逸見Ｔ】
おっしゃる通りで、本当はそうしたかったという思いがある。

【稲本】

ご実践のタイトルに掲げておられる、文学における論理的思考力とは何か教えていただきたい。

【逸見Ｔ】
　どの言葉とどの言葉を関係付けているのか、それをなぜ考えたのか、それを友達は納得できたのかということを想定している。同じ対象に着目しているのに捉えが違うということを感じさせたい。ただ、論理的思考というのはまだ整理できていない。物語から感じた主題が読みを通じて、何が変わったのかを話し合う時間は取っている。

【磯野Ｔ】
　文学の中にも論理があると思っている。それは伏線や時間の推移（入れ替える）、ファンタジーなら場所や時空を越えるといったこと、だと思う。書き手の方にそういった意図があると思う。

【鳥越Ｔ】
　根拠・理由・考えが逸見Ｔが言われていることだと思う。私は説明的文章で修士論文を書いたので、説明文には当然あると思う。けれど、文学にもあると思う。それは表現論理だと思う。説明文の場合はもっとはっきりしている。この時に文学的文章では論理的思考は働かさないのか、と言われたことがある。文学は感性を育てていくところなので、文学的文章では論理を前面に出していくのは難しいのではないかなと思う。

【北野Ｔ】
　文学で何を教えるのか、ということが話題になっているので、そろそろ小川Ｔにお願いしたい。

【鳥越Ｔ】
　もう一つだけ。三次の扱いについて。子供の読みが深まったという読解方略の振り返りもある。それも大切。だけど、作品のおもしろさ、感動の意味付けも大切だと思う。それを振り返る場面も必要なのではないか。

【小川Ｔ】
　すごい深い井戸が掘れたなと思った。収束する部分もあるが、課題も増えたなと感じる。それが良いこと。逸見Ｔのご提案がそこまでの高いレベルだったということでありがたいと感じている。
　論理的思考力は文学の中にあるのか、ということがまず出てくる。説明的文章の中に論理的思考力・感性的思考力どちらもあると思っている。表現を工夫しないと主張が伝わらないので。それは文学的文章でも同じだと思う。自分が読みを創り出す時には、言葉を手がかりにしながら、見方・考え方を働かせることが必要。言葉に着目、よりも、言葉に着目してどう扱うかということが大切。比較するのか分析するのか味わうのか、といった根拠と理由が必要。子供の反応を聞き取る時に、根拠を言ったのか、理由まで言ったのか聞き分けることが重要。中学年までは、その根拠となる言葉を聞くことが重要で、高学年からは、理由を大切にすることが必要。
　部分に反応するというのは、情報駆動。それを六年生でもさせるかということ。海の命を読んで、クエ

を食べたいなぁとか海に行きたいなぁでは話にならない。おとう、与吉じいさとの出来事を通じて、話の軸を作っていかなければならない。自然との共生を描いているから、クライマックスに描写表現を用いて盛り上げているんだなぁと考えることができる。部分を考え、軸を考え、全体を捉え、という読みをしていくことになる。ならば、初発の感想から主題を捉えていないと困る。そうすると、構造を読むことが土台になってくる。丸ごと読みもおもしろ見つけも柱は直観。それを二次で検証していく。これが読むということではないかと思う。授業をする時に、なぜ直観をもたなければならないか、三読法が必要なのかということを意識することが大切。

なぜ物語には変化が必要なのか。変化がなくてもいいではないか。「たぬきの糸車」は変化ではなくて、場面が列挙してあるので、変化はいらない。別の言い方をすると、なぜ語り手は変化を書いたのかという問いに変わる。ここからは思いつきのレベルだが、結局は内容主義なのかなと思った。家族って大切なんだということを読み手に伝えさせようとしたら、作品世界に読み手がどっぷり浸かって共体験しながら、変化していく。読み手は語り手の導くがままに、家族って大切なんだということに思いをはせる。そうすると、文学を読むには、変化に着目するだけではだめだということが見えてくる。「おもしろ見つけ」の「おもしろ」は桑原先生の本からいただいた。インタレスト（心が動く）という意味。作品世界にしっかり入っていきながら、心がしっかり動くということ。では、心が動かない子がいるのではないかということが課題となってくる。この間の実践研で挑戦するかしないかという話題になったところだと思う。三次で読みを振り返る時に、長崎伸仁先生が「納得するか、しないか」という視点を挙げていた。三次で内容を確認するという活動。「大造じいさんとガン」では、内容を振り返ることで、大造じいさんについてどう思ったかという自分の考えをまとめる。一方では、語り手との対話がある。文学を読むということは、イメージをもつことが非常に重要。けれど、そこだけで止まらず、作品が語りかけている意味を捉えていくことが必要になってくる。それは作者と対話しなければならない。作品の構造を捉えること、表現に着目すること。例えば，注文の多い料理店の最後の二文（顔がくしゃくしゃになる）は必要なのか、と考えると、宮沢賢治はそこに何か意味を込めていることが見えてくる。なぜそんな表現なのかという意味を問い直す活動に価値が出てくる

最後に、今日は変化を読むことが中心になっていた。変化にも段階がある。低・中・高学年で何をするのか。ほっといても読めるのは二年生から。変化を読む時に大切なのは山場を読むこと。因果関係を読むこと。（プロットを読むこと）三年生までは、主人公を読むこと。（主人公が何をしたか）四年生以上は、主人公だけではなく、脇役を読むこと。「大造じいさんとガン」では、視点を読むこと。情景描写も重要だけど、それが大造じいさんの視点で書かれていることが重要だということが持論。そして、最後の結末部分を読むこと。それらから、変化を読むという読解方略には段階があるということがわかる。だけど、それで終わってはいけない。そこを踏まえて、豊かな読みができたという自分の読み方のメタ認知、すなわち自覚が必要である。読解方略を身に付けるだけではなく、その内面化、自覚が大切になってくる。振り返りと自覚が重要視されてきている。読みを振り返ることは、対象化するということ。それを自分の言葉でまとめることで、三次につながっていくと思う。

逸見先生、貴重なご実践の発表ありがとうございました。
次回の語る会は２３日(土曜日)附属小会議室です。
赤木先生のご講演をいただく予定です。